

糖尿病患者さんの喪失～患者さんの語り～

医療法人財団はまゆう会 王子病院

市丸喜一郎・瀬川賀世子

人生は喪失と再生の繰り返しであり、時が過ぎゆくごとに人生の一部が次第に失われていくといわれています。また人は二度死ぬとも、一度目は肉体的死であり二度目は人々から忘れられる死ともいわれています。図らずも糖尿病腎症により透析療法を余儀なく選択された方は三度の死を受け入れることによって、より多くの喪失と再生(生きなおし)を体験することになります。

1994年第5回日本サイコネフロロジー研究会において「糖尿病性腎症による透析患者さんは多くの喪失体験を味わい、ともすれば透析室において“やっかいな患者”といったレッテルを貼られやすい。我々透析医療に従事する者は“喪失体験を繰り返し背負った人たちである”との視点で臨む必要がある」と述べられています。

今回のテーマである「糖尿病・慢性疾患・不治の病とのつきあい」について、糖尿病専門医でもない、精神科医でもない、まして臨床心理医でもないただ40年透析医療一筋に務めてきた透析医が、ややもすると透析室は無医地区ではないかといわれるなか、当院の実態を述べるとともに糖尿病と糖尿病腎症の“透析患者さんの語り”を通して感じたことをお話します。

患者さんにとっての糖尿病は糖尿病をもって生きている経験を指しているのであって、糖尿病の概念、知識、数値を指しているのとは違います。彼等にとって糖尿病は人生のストーリーのなかにあるともいえます。

糖尿病患者さんは決して不真面目でも、嘘つきでも、人生に投げ遣りでもありません。極く普通の人と同じように当たり前のことと思われることができないだけで、そのことを充分理解されておられます。ただ、糖尿病に向き合うことに疲れバーンアウト(燃えつき)されているだけです。彼等は視力や運動機能などの身体イメージの喪失、精神的、社会的存在意義の損傷に脅えながら再生に向けて常に生きなおしを考えておられます。私共の施設では視力喪失にもかかわらず点字修得後、透析患者さんとして日本初の盲導犬による生活を始められた方もおられました。

まずは治療現場で、患者さんのお話しにできるだけ耳を傾けてください。その際患者さんのお話しに肯定的関心を持って、共感的に理解し、非指示的アプローチで臨んで下さい。聴いて、聴いて、聴いて、些細なことでもできたことを褒めてやって下さい。透析現場に携わっておられる方なら職域を問わずどなたでも結構です。彼等のお話しが語り(かたり)となり、その人の物語となって、お互いがフローの状態になれば、それは最高の喜びです。

今回の“語りの会”で得られたもの(情報)は極く限られた範囲に止まり、認知症、超高齢者、視聴覚多重障害、非常に気難しい人(20年前にいわれた“やっかいな人”)といったアプローチが極めて難しい現実もあります。しかしながら透析患者さんのお話を聴くことから始めた私共の“語りの会”は narrative based-medicine といえるのかどうか自信はありませんが、“かたり”という不思議な力を感じています。